令和８年度鳥取県立図書館特別資料展関連行事　郷土文化講演会　　令和８年１１月１５日（日）

講話「杉原一司の足跡をたどる　～近年の出版物を中心に～」

鳥取県立図書館郷土資料課　学芸員　佐藤紘一

はじめに

杉原一司〔１９２６－１９５０〕は、歌業わずか６年ほどと大変短い期間に才能を著した歌人である。最初期には鳥取の文化的開拓者・吉村撫骨に和歌を習い、のち歌は芸術でなければならないとした前川佐美雄（朝日歌壇選者）に師事、前衛短歌から現代短歌に至る短歌史に名を残す塚本邦雄と共に同人として活動し、青年歌人のまま２３歳の若さで亡くなり、夭折歌人の一人とされてきた。

短歌史において、戦後短歌の潮流の一つとなった前衛短歌を巡る言説の中で、一司はその前史といえる期間に中心となる活動時期が定められる。これまで、塚本邦雄を対象とした研究の中で言及される人物として、一般にはほとんど知られることのなかった存在であった。

しかし、近年の一司に関わるまとまった刊行物を通して、一司の歌業に触れることができるようになった。

【図書】　『メトード歌文集』（杉原一司歌集刊行会編刊、令和２年３月）
『杉原一司歌集』（杉原一司歌集刊行会編刊、令和２年３月）
『杉原一司宛前川佐美雄書簡』（岡村知子ほか編、鳥取大学、令和３年３月）
『杉原一司 塚本邦雄 往復書簡』（岡村知子ほか編、鳥取大学、令和４年３月）
『杉原一司全集【歌文・対談座談会篇】』（岡村知子ほか編、鳥取大学、令和７年２月）※『全集歌文』
『杉原一司全集【ノート・手帳篇】』（岡村知子ほか編、鳥取大学、令和８年３月））※『全集ノート』
・・・以下、※印の書名とする

【論稿】　「杉原一司全集のために」（『地域学論集』（岡村知子ほか著、鳥取大学、令和５年３月～令和６年３月））

１　郷里・丹比の若者が文学に目覚める

大正１５年８月、当時の八頭郡丹比村（現八頭町）に生まれ、鳥取県立鳥取商業学校に入学。在学中、吉村撫骨（ぶこつ、鳥取市）に短歌指導を受け、作歌活動を始める。昭和１８年１２月に繰り上げ卒業となり、安部国民学校に勤務、この後同僚の紹介により『日本歌人』を主宰する前川佐美雄に師事する。

【展示資料】一司に宛てられた前川の書簡（昭和19年７月）に添削のことが記される。

２　一司の文学的周縁

『杉原一司宛前川佐美雄書簡』には前川佐美雄との文学交流の跡が見える。書簡には具体的な作歌指導は記されないが、当時の前川の志向する短歌や同人活動の在り方が示され、一司の「文章」や『オレンヂ』鳥取支部の中心となることを期待したことが分かる。

【展示資料】評論「みづからの鞭―二十代の角度―」（『オレンジ』２巻５号（昭和23年１月１日）所収）
※『全集歌文』に「杉原一司既刊述作目録」が所載される

同時代の歌人らと同様に戦後の短歌表現への関心（詩歌の韻律、新しい歌語（言葉）の試み）を持ち作歌に取り組む。特に「作品を構成する方法」「造型的に組みあげ」ることへの関心が示される（略年譜昭和24年参照、『全集歌文』p223）。

また一司は、他の芸術への視野が広く、西洋哲学、美術思想史、海外の詩歌論も積極的に吸収している。これらへの理解がうかがえる評論、透徹とした人間性を感じさせるエッセイとが、一司の文学実践として残っている。

これらは、単に文章だけでなく、丹比で共に活動した小谷五郎らとの対談記事によってもうかがうことができる。

【展示資料】ノート「詩論研究篇　Ⅰ　詩論 芸術論」には、既存の哲学、美術論などの筆記が見られる。

３　文芸同人　『詩歌祭』『花軸』『メトード』

郷里では、小谷五郎、石塚敏夫、坂本好秋、杉原令子、中林睦雄らとの同人雑誌の創刊が相次いで見られ、一司は発行所を担うなど評論や座談会参加者として、文学的議論や活動の主体者の一人であった。後年の塚本邦雄らと創刊した『メトード』においても編集、印刷の工程を精力的に担う姿が、塚本の文章によって明かされている。

また塚本の書簡からは一司との文学的つながりが濃密であった様子を知ることができる。

【展示資料】昭和 24 年当時の塚本書簡には、『メトード』では一司が中心となること、一司の作品への批評などが認められる。

４　杉原一司を通して

例えば『全集歌文』では、これまで知られていなかった、戦中に発行された歌誌『やまと』に１８首の歌が掲載されることが確認されている。全集や書簡集によって新たな杉原一司の姿を発見する機会を得た。

一司が地域の文学を友とする同人らと精力的に活動をしていたことが明らかとなった。小谷五郎ら既知の人物以外にも幾人かの面々の活動や県内歌壇との関係が新たに知られ、一司の文学的土壌や活動の実際を考える視座が示された。

○略年譜（資料展掲示資料、参考『杉原一司全集』（２０２６））

年代		できごと
大正１５年	１９２６	８月２７日、鳥取県八頭郡丹比村（現八頭町）に生まれる
昭和８年	１９３３	丹比尋常高等小学校に入学
昭和１４年	１９３９	鳥取県立鳥取商業学校に入学 同学年の中林則男、岸本光治と吉村撫骨の指導を受け短歌を作り始める
昭和１８年	１９４３	１２月２２日、繰り上げ卒業 １２月３１日から、安部国民学校に勤務 これ以後、同僚の石塚敏夫（『日本歌人』同人）の紹介で前川佐美雄（『日本歌人』主宰）を知る
昭和１９年	１９４４	短歌雑誌『やまと』１巻１号（７月１日発行）に２首がとられる 「鶏飼ひて忙しくあらむ君思へば別れ住みつゝあはれはふかし」
昭和２０年	１９４５	３月２７日、応召（１０月初めに宮崎県から復員） 同じ部隊の佐々木一雄と歌集の作成を計画したが、のち実現せず ４月３日～翌年１月４日の間、前川佐美雄の妻子が杉原家に疎開 （この間、前川自身も度々訪問し滞在）
昭和２１年	１９４６	短歌雑誌『オレンヂ』（前川主宰）の同人となり、１巻１号（１１月１日発行）に５首がとられる 「かつて我身をゆさぶりし激情のかへりくる日は虹かかりをれ」 １１月、坂本好秋らと同人雑誌『詩歌祭』を創刊
昭和２２年	１９４７	４月１日～翌年３月３１日の間、丹比小学校に勤務 学校新聞を発案し、自らガリ版刷で作成する ４月、小谷五郎らと同人雑誌『花軸』を創刊 ８月、故中林則男の遺稿歌集『落果』を編さん
昭和２３年	１９４８	４月、塚本邦雄と初めて対面（丹比において） ５月１日、天理語学専門学校本科フランス語部（現・天理大学）に入学 この後、奈良県内で下宿生活となる １０月、『オレンヂ』の系統誌『くれなゐ』を脱退
昭和２４年	１９４９	「座談会　三十世代の短歌観」に『オレンヂ』同人として参加し『風物』第６輯（３月１日発行）に掲載される ８月、塚本邦雄、岸本光治らと同人雑誌『メトード』を創刊
昭和２５年	１９５０	『メトード』２巻２号（最終号、２月１０日発行）に「初等文法」５首を載せる 「ヒヤヤケキ彫刻ダイにかけのぼりマナコまで石化シテヰタル犬」 ２月、丹比に戻る ５月２１日、鳥取の入院先で亡くなる（享年２３）